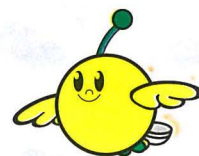


平成27年度「ふくしまの道德教育」



～未来をつくる子どもたちの豊かな心をはぐくむために～

道德のとびら





「道徳の時間」とは？

「道徳の時間」は、小学校・中学校それぞれの学年で、１年間に35時間（小学校１年生は34時間）あります。「道徳の時間」では、思いやり、家族愛、生命の尊さなどさまざまな内容について理解し、自分を見つめ、考えを深めることなどを通して、道徳性を養っています。

学校では、すべての先生方が協力して学校全体で道徳教育を進めています。まず、校長先生が道徳教育の方針を明らかにし、その上で、道徳教育推進教師が中心になって道徳に関する計画を作成しています。また、道徳の時間には、学校の先生方だけではなく、地域からゲストティーチャーを招くこともあり、工夫した授業が行われています。

授業を開いて始めよう ～校内の道徳教育推進について～



いわき市立宮小学校 校長 鈴木 廣美
平成30年から教科として位置付けられる道徳。学校現場は、現在、教科化に向けた準備期間中です。「今までやってきた『道徳の時間』と何が違うのだろう。」教師には、授業の工夫が求められています。

そこで、本校は、校内研修で「道徳」を研究することにしました。研究を進める上で大事なことは、「難しい」と思わないようにすることと、全職員が参加することです。改めて、道徳の授業を見直すために、全員で新旧の学習指導要領を読み、これからの授業に取り入れられる内容について吟味しました。教師が、お互いに授業を開き合い、活発に質問や意見を述べ合う研究授業が、研究推進の核になっています。また、家庭や地域と連携するため、先生方は参観日や教育週間を利用して、積極的に道徳の授業を公開しています。本校の新しい「道徳科」に向けての取組は、授業を開くことから始まっています。



ゲストティーチャーが参加した授業

ゲストティーチャーをお招きして



鮫川村立鮫川小学校 教諭 矢吹 隆浩
ゲストティーチャーを招くにあたり、その授業における中心価値から内容がそれないことや授業のどの段階で登場していただくのかなど、事前打ち合わせを行い、効果的に入っていただけるよう配慮しました。ねらいや価値にあったゲストティーチャーの方々においでいただけるようにするのも、道徳教育推進教師の役割の一つであると感じています。児童一人一人の心により深く響き、児童自らが人間としてのあり方や生き方を見つめ直し、生活に生かそうという思いを強く持つことができた道徳の授業になったと思います。

ゲストティーチャー 口笛奏者 高木満理子

先日は、鮫川小学校で、ゲストティーチャーと演奏でお世話になりました。長所と短所をテーマにした授業でした。子どもたちは柔軟な発想で様々な意見を出していましたが、自分の短所も見方によっては長所にもなるという意見に、なるほどと思いました。

私は子どもの頃から口笛を吹いていましたが、うるさいと言われることも多く、特に長所と思っていませんでした。でも、続けていくにつれほめられることも増え、長所なのかもしれないと思い始めました。自分の長所と短所を主観的に見つめ直すのと同時に、周囲の人たちに客観的にアドバイスしてもらうことで自分がよりよくなれるのかもしれない。勉強になりました。先生方、児童のみなさん、ありがとうございました。



道徳教育推進教師として



いわき市立大野第一小学校 教諭 藤川 幸恵
小・中学校での道徳教育は、校長の方針のもと、道徳の時間だけでなく、各教科や学校行事など、全ての教育活動で取り組まれています。全教師が一体となり、協力体制をつくって進めるために「道徳教育推進教師」が中心的な役割を担っています。

本校では、道徳の時間と様々な教育活動の関連を図るための計画を作成したり、道徳の時間の充実のための情報を提供したりしています。

また、家庭や地域の方に道徳教育に関心をもっていただけるよう、授業参観やふくしま教育週間などで、全学級の道徳の授業を公開しています。

地域全体で推進する「大玉村」の取組

平成26・27年度の２年間、大玉村は県から「人権教育」研究推進事業の委託を受け、村全体で人権教育を推進してきました。今年度は、道徳や国語科、算数（数学）科、美術科などの各教科と特別支援学級の生活単元学習、幼稚園教育を柱にして研究を進めました。11月25日（水）に行われた「おおたま学園公開授業研究会」には、県内外からたくさんの先生方が訪れました。

『道徳教育』大玉村の取組 ～それぞれの役割を果たす～



大玉村教育委員会 教育長 佐藤 吉郎
これからの教育には、グローバル化した変化の激しい社会を主体的に生き抜く力を育てていくことが求められており、「道徳教育」を一層充実させることが必要です。その際重要なのが、学校における道徳教育の充実に加え、家庭や地域と連携した道徳教育の推進です。

大玉村では、平成26年度より２年間、村内すべての幼稚園・小・中学校で組織する「おおたま学園」を挙げて「人権教育」に取り組みました。渡辺学園長がその概要を述べておりますが、その中核となったのが、道徳教育の充実です。こうした学校での取組に加え、平成23年度に導入した「おおたま学園コミュニティ・スクール」制度を生かして、毎年「教育フォーラム」を開催するなど、家庭や地域と一体となった取組にも力を注いでいます。

今後も、学校と家庭等それぞれの役割をしっかりと果たすとともに、連携を一層密にしながら、村を挙げて子どもたちの心を耕し、豊かな心を培っていききたいと考えています。

持続可能な人権教育



おおたま学園長 大玉村立大玉中学校 校長 渡辺 康弘
おおたま学園では、「共によりよく生きる子どもの育成～自分の大切さとともに、他の人の大切さを認めよう～」をテーマに、子どもが安心して生活できる学校づくりや、一人一人のよさを見出し、個性や能力を伸ばすことを大切に、人権教育に取り組んできました。そのベースとなるものが、幼稚園・小・中学校それぞれの発達の段階に応じ、こころ豊かな人づくりの指針として、学校の教育活動全体を通じて、子どもの人権に関し配慮すべき具体的内容を示した「人権教育フィルター」です。これをもとに、日常の保育・授業においても「人権」という視点で指導を振り返り、常に改善に努めるスタイルを定着させてきました。「持続可能な人権教育」がおおたま学園の合言葉です。

人権教育に視点をあてた「道徳の時間」

道徳の授業の充実を目指して



大玉村立大山小学校 教諭 佐藤 由紀
「道徳の時間ってどんな時間？」担任している１年生の子どもたちには、「どんなことを話してもいい時間だよ。」と話しています。素直な子どもたちですから、自分の考えを偽りなく、ありのまま話してくれます。おおたま学園の公開授業研究会で行った授業（はしのおおかみ）でも、子どもたちは、「親切にすると楽しいよ。」「優しくするよういっぱいがんばるぞ。」「優しくできるかなあ。」など思い思いの考えを発表していました。道徳が「よりよく生きることを学ぶ時間」になるよう授業の充実にも努めていきたいです。

子どもとともに道徳を学ぶ

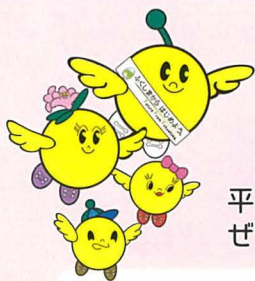
大玉村立玉井小学校 教諭 齋藤みちる
「道徳が楽しい」と子どもたちは言います。なぜと聞くと、「自分の思いや考えをたくさん話せるから」と。何でも話せる学級経営があってこそ、道徳の時間が自分を振り返り、自分に向き合い、よりよい生き方を学ぶ時間となると考え、普段の教育活動に取り組んでいます。また、問題解決的な学習を取り入れ、話し合ったり聞き合ったりすることを大切にした「考え、議論する道徳」を目指しています。先日の授業で、始めと終わりで考えが変わった子どもが話していました。「みんなで考えたからぼくの考えが変わった」と。私も日々学んでいます。



郷土について考える道徳の授業



大玉村立大玉中学校 教諭 八巻 恵奈
今回の授業テーマを「郷土愛」にした理由は、母校である大玉中学校の生徒とともに、改めて大玉村のよさについて考え、故郷に誇りをもってもらいたいと考えたからです。また、震災時、大熊町の学校に勤務していた経験から、震災資料を活用して、作者の気持ちに寄り添いながら、故郷について深く考えさせたいと思いました。授業では、地域のゲストティーチャーを招いたり、ふるさとに想いを寄せる中学生の作文を朗読したりすることによって、故郷の素晴らしさなどに気付かせ、より深く郷土について考えさせることができました。



「モラル・エッセイ」コンテスト最優秀作品

県教育委員会では、毎年「モラル・エッセイ」コンテストを行っています。今回ご紹介するのは、平成27年度の部門別最優秀作品です。次は、みなさんの心温まる体験談やすてきなエピソードを、ぜひお聞かせください。

中学生の部 「ランドセル」

会津若松市立第二中学校 1年 伊藤 要

平成23年3月11日、ぼくは富岡町に住む小学2年生でした。小学校で帰り支度をしている時に、東日本大震災が起きました。原発事故もあり、ぼくたち家族は、母の実家のある会津若松市に避難しました。まさか長期の避難になるとは思わなかったもので、持ち出した生活用品もわずかなものでした。ぼくの学用品も全て富岡町の小学校に置いてきたままでした。

新年度から会津若松市の学校に通うため、教育委員会に母と行きました。手続きが終わると、ある部屋に案内されました。その部屋に入ると、たくさんの学用品が積まれていました。ノートやえんぴつなどの文房具や、絵の具のセットなどが、日本中から支援物資として集まっていた。その中にランドセルもありました。ぼくが選んだランドセルにはプロ野球チームのシールがはられてありました。6年間使用している間についたであろう細かい傷もありましたが、まだまだ使えるものです。ぼくは「どんな子が使っていたんだろう。野球が好きな子なのかな。」と頭の中で想像しました。そして、一度も会ったことのないランドセルの持ち主の子ですが、友達になったような気持ちになり、「ガンバレ」と応援されているように感じました。ぼくは、その支援物資として届けられたランドセルを背負い、始業式の日に転校先の学校へ向かいしました。友達は一人もいないし不安だらけでしたが、ランドセルを背負った背中が、なぜか温かく感じ、まるでランドセルに励まされているかのようでした。

あれから4年、会津若松市での生活にも慣れて毎日元気に過ごしています。一度も会ったことのないランドセルの持ち主の人に、ひとこと言いたいです。

「あなたのおかげで勇気ができました。本当にありがとう。」

高校生の部 「これからも私は、沢田応援団」

福島県立白河高等学校 1年 野内 佳奈

昨年8月、私たちの中学校は文化祭を2か月後に控えていた。この文化祭に対する私たちの思いは特別なものだった。当時中学3年生だった私たちにとって最後というだけでなく、私たちの中学校としても最後だったからだ。

沢田という小さな地区にある私たちの中学校は、全校生がわずか49人。今年の3月には統合のため、閉校を迎える予定だった。そのため、長い歴史のフィナーレを飾るのにふさわしい出しものを考えている時のこと。

「全校生で応援団をやってみねが？」

校長先生のこの一言は、まさに鶴の一声だった。中学校が閉校を迎えるとあって、沢田地区の雰囲気はどこか沈んでいた。その沢田を元気づけられるのなら、と私たちは意気込んだ。

応援団の練習は朝の時間、そして昼休みを利用して毎日行われた。校長先生自ら応援団の指導にあたり、その熱意に引っ張られるように私たちも練習に打ち込んだ。

そして迎えた文化祭当日。沢田地区からは、地域の方々をはじめ、歴代の卒業生が学校として最後の文化祭を見届けに来ていた。

「がんばれえー、がんばれえー、さあーわあーだあー！」

体育館中に響きわたるような声を張り上げながら、49人はそれぞれタイミングを計って振り付けを揃える。そうやって激励しながら、私は自分たちはいつも沢田地区の方々に支えられてきたことを実感していた。通学時の「いってらっしゃい」や夏休みの資源回収の時の「暑い中ご苦労さま」の声は、どこかくすぐたく、温かかった。

全校生による応援終了後、体育館は盛大な拍手に包まれた。涙を浮かべている人もいた。こうして最後の文化祭は大成功で幕を閉じたが、私はこれからも沢田を応援していきたい。地域の行事に積極的に参加するなどして、沢田をもっと元気にしていきたいと思う。

一般の部 「ふるさと」

大塚 由美

青竹色の空、山鳩色の雲。萌木の風、青丹の山、そして常磐の光。ここには、そんな緑色があふれている。この色に包まれているだけで身も心もほぐれていく。そんなかけがえのない場所がある。

大学を卒業し、学友たちは皆それぞれの人生を背に故郷へと帰って行った。私はある決心があり、一人灰色の東京に残った。ふくらむ夢とは裏腹に折れそうになる心を抱えての日々だった。

アルバイトを終えての帰り道。商店街のアーケードの一画。いつもの重い足取りがそこでぴたりと止まってしまった。小さな八百屋の前だった。おいしそうに並んだ赤いトマト。そして、一段高い位置に置かれた高級そうなトマト。「特別おいしいトマト」と添えられ誇らし気に皿に乗っていた。高価で手が出ないと思いつつも、その鮮やかな赤に私は目をうばわれていた。そして次の瞬間、あふれ出た涙の向こう側に見えたのは、「南郷トマト」の文字だった。なんでと問われると答えられないけれど、涙が止まらなかった。

我が故郷は南会津の小さな農山村。トマトの里南郷である。

翌日、故郷の母から地元で栽培された尾瀬りんどうの花が送られて来た。凜として青いその花は、なつかしいふるさとの香りがした。